

松廼舎文庫旧蔵『金春系譜』所収史料考 — 吉田東伍博士自筆ノート続稿 —

佐藤和道

一、はじめに

能楽研究の嚆矢として知られる吉田東伍博士の旧蔵資料については、昨年度⁽¹⁾「演劇研究センター紀要Ⅶ」における拙稿「近代前期の芸能史研究 — 吉田東伍博士自筆ノートを中心に —」（以下「前稿」と略称）において、博士自筆の能楽史・芸能史関連ノートの概要を中心に報告した。本稿は、前稿で十分触れることのできなかった金春座関係のノート二編（「金春座旧案」、「金春系譜考」）を紹介し、考察するものである。これらのノートは、大正三年に刊行された、『⁽²⁾金春系譜考』と略す）の準備の為に作成されたと考えられるもので、前稿では、本ノート付属の吉田博士宛「覚書」を紹介し、『⁽³⁾禪竹集』が金春榮次郎氏より借り受けた金春八左衛門家相伝本と、松廼舎文庫に所蔵された金春安住筆『金春系譜』に拠ったことを指摘した。吉田博士は、このノートについて、

大正二年五月下旬安田善之助氏所蔵ノ金春安住ガ記（金春系譜ト仮ノ題シ三冊に分ツ）ヲ基トシ、爾余ノモノヲ取合セテ此一冊ヲ為ス

と記しており、本書が『金春系譜』と題された三冊の書であったことが知られる。本書は「安住系譜集録」等とも別称されているが、本稿ではノートの記載に従い『金春系譜』と呼称することとしたい。

この『金春系譜』を記した金春安住は、金春家の分家八左衛門家の当主であったが、金春諸家相伝の文書類を調査し、それらを多く書写したことで知られる。伊藤正義氏は「安住行状之大概」（『庶民文化史料集成第三巻 能』）解題において

金春家の本家・庶家歴代の中でも、安住は飛び抜けて筆まめであった。「金春安住記」は、吉田東伍『禪竹集』、野々村戒三編『金春十七部集』などに資料として有効に利用された者であるが、不孝にして現存しない。また「大概」中に屢々記される「別記」なるものの多くが失われている。にも拘らず、なお般若庵文庫に現存する安住筆の記録・書留の類は多い。それはたしかに、右「成身院縁記」筆録などからも伺えるように、知的好奇心にあふれる彼自身の天性の資質による物であろう。と記された如くである。なお、野々村戒三氏が『金春十七部集』の底本とされた『金

春安住記』は、奈良市在住の高阪惣七氏旧蔵文書であったが、戦時中に大阪の某氏に貸与されたまま紛失した由である（『金春古伝書集成』四八頁）。また、『金春十七部集』に所収される「五音の能の心持の事」、「百ヶ條」、「禪鳳申楽談儀」の四篇は、吉田博士のノートに書写されておらず、野々村氏の参照された『金春安住記』と『金春系譜』とは、異なる内容であったと考えられる。

次章以下では、この『金春系譜』を書写した二編のノートについて、その内容を紹介し考察を行いたい。

二、「金春系譜考」所収史料考

まず、「金春系譜考」と題されたノートについて見ていきたい。内容のまとまりごとに番号を付し、適宜資料名を記した（新たに名を付したものは□で示した）。

①「題名」冒頭に「金春系譜集録」と記し、その後

安住ノ集録二第一二係ケシハ元和七年讓状ニアルモノニ相当シ本業ハ禪鳳ナドノ記セシヲ相伝セルナラン

と記す。「安住ノ集録」とは、松廼舎文庫所蔵の『金春系譜』を指し、また「元和七年讓状」は、同年の奥書を持つ『金春家之書物之日記』を指すことが明らかである。

②円満井座系図 禪竹自筆本が『金春古伝書集成』に翻刻されているが、ノート記載分は、金春八左衛門安喜による転写本である。そのことは末尾に記された以下の識語よりわかる。

金春家所出於秦河勝歴代秘曲伝家督一人而其他庶子傍孫遂不能窺闕奥於萬一矣雖然如是兄七郎氏勝不幸而早世故老父家伝之秘曲教授於我所令相伝也今又汝家伝秘曲不遺所令教授也莫令断絶矣

金春家の代々の伝りの書物は江州佐々木殿くつれにうせ申候由安照云仰候也

明暦二年丙申 五月九日 金春八左衛門安喜（花押）

六十九歳 金春七左衛門殿 参

安喜は、金春大夫氏勝の早世による伝書散逸の危機を覚えた父安照により、金春家伝書の相伝を受けた。『金春家之書物之日記』にも「金春家のケキツ」としてその名が見え、本書もこの際に相伝を受けたものと思われる。

③金春家之系図之覚 奥書に「寛文十三年癸巳八月八日 金春太夫 秦元信判」と記され、金春大夫八郎元信による寛文十三年書上であることが明らか。般若窟文庫に同名史料が所蔵されている。

④金春家之系図 奥書には「寛文十三年癸巳九月十三日 金春太夫 元信名判有」とあり、③同様般若窟文庫に同名史料が現存する。秦河勝より元喜まで歴代の金春大夫の名前を列挙したもの。

⑤うたひ能初り之事 (二種) 般若窟文庫所蔵文書「延宝二年五月 元信より因幡殿宛うたひ能初り之事」及び、「宝永四年五月二十二日 西の丸書上」に同じ。内容は秦河勝と六十六番猿楽に関する伝承について。

⑥金春家之系図之覚 ③の般若窟文庫所蔵史料に貼紙された部分と同じ。

⑦「竹田権兵衛広富前田綱紀宛書上」 末尾に、「右は家書之内所々御座候趣又は亡父安信間書物語仕候通依尊令猥事記備高覧候以上」とあり、さらに「○前段一通ハ権兵衛廣富法名宗繁ヨリ加州太守へ宛書」と注記されていることから、竹田権兵衛廣富より加賀藩主前田綱紀宛の書上と考えられる。内容は、田楽、琵琶法師、翁猿楽、神楽の濫觴説話、秦河勝と六十六番申楽に関する記述が主なものである。竹田権兵衛家の書物については、『安住行状之大概』にも「竹田家書留五冊、由緒書、御印物一式之箱、(中略) 皆々預り遣ス也」(文政九年四月廿九日条)とあり、披見の機会を持っていたらしい。

⑧金春家之系図之覚 本文は③に同じ。それぞれに、安住の注が付されている。

⑨「金春八代以来略系図」 竹田権兵衛広貞の編とされる。般若窟文庫の「金春大夫八代以後嫡流諸氏略系図」(『金春十七部集』収録)に同じ。

⑩能濫觴之事 金春八左衛門勝成による『享保六年書上』(『庶民文化史料集成 第三巻 能』収録)の同名部分を引く。般若窟文庫にも控えが残されている。

⑪六十六番の事 「金春安住の系譜記の首條に載す」と吉田博士が注記するように、『金春系譜』の冒頭に配置された書らしい。末尾には、「安住はこれを何書より引けるにや猿楽伝記か」と注記するが、『猿楽伝記』にもこれと同じ説は見えない。内容は、六十六番の曲舞の作り出された経緯を記すもの。

⑫「秦楽寺旧記」系図 明和三年十月大和国竹田里服部氏より秦楽寺旧記中に載する所の家系を写し越されたる写し」として、「大津父」から「元重」までを列挙し、簡単な略伝を付す。二番目の「広隆」を「広田」とする他は、『金春古伝書集成』(六二五頁)に記された系図と同内容である。なお、秦楽寺は秦河勝創建とされる寺院で、奈良県磯城郡田原本町に現存する。

⑬「氏綱問答」 末尾の安住の注には、金春七郎氏綱の書とある。「寛文十三年書上」と「享保六年書上」から、秦氏安、秦元清に関する系図上の矛盾点等について記したもので、⑭と内容的には重なる。以下に本文を引用する。

一寛文十三年癸丑年八月金春大夫元信書上候系図ニ氏安ヲ秦河勝之息男ト有之候是ハ殊ノ外時代相違候考相誤候カ享保六辛丑年六月八左衛門書上候ニハ河勝次男ト有之候

答

此趣相考候処禅竹之書ニ先祖秦河勝其子孫村上ノ御宇秦氏安其ヨリ廿六代ノ遠孫円満井ノ座竹田ノ毘沙王權守光太郎ト有之候然レ此通ヲ不書上趣ハ元信書物ヲ不好故庭訓ノ古注ヲ至極之儘成実書ト存候テ家之儘成古書ヲ却テ相違ト思不書上候ト存候庭訓古註曰河勝子有氏安云者其子有三人 金衣 金春 満太郎ト云テ有三人云云以此書証拠トシテ河勝息男ト書上候ト存候

一享保六辛巳年六月能之濫觴御尋之時節金春八左衛門勝成(金春大夫後見) 金春家之系図書上候中ニ左衛門大夫元清ヲ式部大夫氏信法名禅竹父ト書リ然レ二親世大夫先祖世阿弥俗之時左衛門大夫元清ト云シトナリ両様何レカ実ニ候ヤ

答

左衛門大夫元清ハ禅竹父ニテハ無之シウトニテ御座候書付相違仕候
一寛文十三年癸巳八月御尋之節金春太夫元信(法名即夢) 書上候系図ニハ左衛門太夫元清ヲ何ト書上候ヤ

答

是亦氏信父ト書上候此旨相違ナル故前々ヨリノ書付共吟味仕候処儘成書付有之候然レ其書付ヲ指上申候事不審故ニ数年種々相考候処儘成書ヲ不書上儀委敷相知申候其趣ハ元信ヨリ九代前式部太夫氏信嫡子江贈り候書ニテ少モ違無之書ニテ御

座候然ヲ不書上候儀ハ風姿華伝三卷目之奥書応永七庚辰卯月十三日從五位下左衛門大夫秦元清右之コトク有之テ卷之終ニ金春ト書シ判モ有之候此花伝之文段之中ニ觀世ト書候文字カツテ無之候其上秦川勝之事ヲ初氏安ソレヨリ光太郎弟金春江之代々之年数且仏舍利聖德太子御自作之面之事ナト委細ニ書有之故慥ニ金春之先祖之書ト相心得奥書年号之時代禪竹父ニ相当ル故禪竹書氏信父ト書禪竹書ニハ左衛門大夫ト申名ハ無之ユエ相違ナリト思禪竹書ヲ不用候ト存候式部大夫氏信前江書入候ト存候

一元信ハ至テ剛氣ナル生ツキニテ鍛術ヲ專ニ修行仕書物ハカツテ好不申候よし古キ弟子共申候夫ユエ庭訓ノ古注ヲ至極之慥成書ト相心得候事ト存候故相違有之候ト存候

△安住云右之趣者氏綱息翁自問答ト見ゆ

⑭安永年中元隣(寛玄)ノ記

⑬と同じく氏安・元清に関する『寛文十三年書上』における誤りを正すもので、氏綱およびその子元鄰による書留である。浄元は金春八左衛門安喜で、文中の「浄元八左衛門被書候系図」及び「上宮王太子ト有之系図」は、②に写しが見える『円満井座系図』と考えられる。このことは、『金春古伝書集成』所引(三三頁)の安住の書留に

上宮王太子 是ハ安喜新作ト目錄ニアリ。是、禪曲公ヨリ聞書ノ金春系図ナリ。安喜奥書斗、宛名ハ権兵衛也。

とあることから裏付けられよう。以下に本文を記す。

一結崎左衛門大夫ト申候ハ觀世世阿弥之事ニ而禪竹様之シウトニテ御座候ソレヲ即夢ノ時分ニハ此方之先祖ノ内へ御書出シ被成候且秦川勝より秦氏安迄ハ五十何代ト申程ヘダ、リ候事ニ御座候ヲ川勝子息氏安ト認御出し被成候是も大間違併先祖ノ非ハ上ス事ナガラ餘タ大違モシ又々御吟味御座候ハ、打寄相談ノ上可申上事ノ由氏綱被仰候

一金衣金春満太郎ト世上ニテ申候事ニ御座候是ニハ大キニ違之有事之由被仰候

右之事ハ庭訓ニ有事ニテセウコニナラズ

○安住云庭訓ノ古注ト云モノニケ様ノ事又ハ急度証拠タ、ヌ事共多有之也 氏綱ハ息翁禪休ナリ

浄元八左衛門被書候系図禪竹居士之御書物ヲ為本少々自分之了簡被書加候趣ニ見ユ是ニモ左衛門大夫秦元清之名無之元信八郎殿ニハ代々ノ実名何ヲ以テ吟味被有之は認メラレケルカ甚不審也氏安ヲ川勝之息男ナリト被存違候程之趣故何角相違ナル事共多キ也ベシ禪竹居士御書物ヲ根本根元ト可心得肝腰也

明和元年申年七月九日於東武書之畢

○安住云右之趣意ハ即夢居士之公辺江書上候系図也一件ニ付か様ニ無被書添置被申也安住兼考ニ元祿之頃公儀ヨリ御尋之節代々ノ仮名実名夫が不分明ナラバ法名ニ而も申進也触流方ヨリ通達也何十代と斗ニ而ハ其節ノ模様不宜事もアリ且は家ヲカザリ被申候に了簡もアルベシ代々ノ実名ノ節略ハ左迄誹難ニ不及歟是も家ノ為又ハ其砌ノイキヤイ潤色ノ一ツ也タゞ氏安ヲ河勝ノ息男ト被心得候ハ時代ノ大相違ニ而は他ヨリノ誹難ノガレガタシ并元清ノ事ヲ貫氏同人ニ而廣貞も系図ニ入レタリ定而ミル所アルベシ

金春大夫元信寛文十三年書上

此系図書ニ通御上へ上り申候扣ニテ可有之候が何角前々ほと吟味も荒増ニ候間召送候事共有之候た、しきハ本家ニ而ハ禪竹様薪寺より宗筠元氏様へ御認メ御送り被成候自筆の系図書是ハ本書ニ御座候此方ニテハ先浄元公之御自筆之紺ノの表紙の巻物上宮王太子ト有之候系図カ本書ニ御座候間左様に御心得後世忘却すべからす

安永八亥六月 竹田金春八左衛門

秦元鄰 判

一左衛門大夫元清ハ觀世之先祖世阿弥之中年之時の名也禪竹公のしうと也

一氏安公は河勝ノ子ニテハ無之余程代ヘダ、リ申候 村上天皇之御代之人也河勝ハ名也実名ハ廣隆ト申候事紺之巻物之通り光太郎迄之間の代々の名乗ハ一向知レ不申候が如何いたして知レ申候哉禪竹様の自筆ニも知レヌ由也こんの巻物ヲ見ベシ

一左衛門大夫元清ハ觀世太夫先祖金春法名禪竹ノシウト也金春系図書上ケ申候節ワカリカネ申候故左衛門大夫も此方先祖之様ニ系図ニ書差上申候由是ハ間違之由此方系図ニハ外祖故書込有之候由其書上ハ法名則夢八郎様時代之由左様相心得申候様ニ氏綱被申候

○右者元鄰法名惠空寛玄居士書留也

⑮〔四箇条書留〕 金春家にまつわる伝承について箇条書する。文中には、「金春家累代所持仕候系図」が、「佐々木六角家散落之時紛失仕候」と記されているが、前出の八左衛門家本『円満井座系図』奥書に「金春家の代々の伝りの書物は江州佐々木殿くつれにうせ申候由安照云仰候也」とあるのと一致する。佐々木氏は、近江の守護大名で「近江太守」と呼ばれた六角氏を指すもので、「松下云言之状」(後出)に六角(佐々木)定頼が金春大夫を後援したことが記される如く、金春家の有力な庇護者であった。文中に言う「佐々木六角家散落之時」は、弘治十一年の織田信長による侵攻を指すもの

と思われる。

また、本資料の著者は、竹田権兵衛と「代々相互二欠如を補」との記述や、⑭・⑮同様に『寛文十一年書上』に對し疑義を唱えている点から見て、八左衛門家（氏綱か）の人物が記した書留と推測される。内容は、金春家の遠祖秦氏について記すものである。

金春大夫累代所持仕候系図并飛鳥井中納言雅世卿清書之系図二一條禪閣兼良公御加算有之候巻物ハ佐々木六角家散落之時紛失仕候近代儘成系図所持不仕候依之故八郎元信先年系図指上候ハ撰州天王寺秋野より写束候記録并和州橋寺二伝来之記等を写指上候然共右両品共二信用難仕儀共故此度ハ措之別二承伝候通書記上之申候金春大夫代々嫡伝之大事ハ子細之儀御座候而私方并京都二住居仕加州より知行被下候竹田権兵衛方面所二悉伝受仕代々相互二欠如を補来候勿論本系図ハ三家共唯今所持不仕候得共此度ハ右竹田権兵衛及私手前二承伝候通書集指上申候

一金春座之遠祖ハ周武王之弟周公旦之苗裔孫魯公之氏族累世真儒礼樂之家二而御座候周室衰魯国政乱儒士楽官河海二入尚残止者ハ秦始皇帝三十四年丞相李斯進而秦記医書葉ト葢種樹之書之外詩書百家語悉焼焼三十五年良士之忌諱を不畏無諛者四百六十余人を皆阮之候是之時九夷二遷居候者之内金春遠祖ハ 君子国之仁風を慕本朝二皈化仕候者を豊楽翁と申伝候秦始皇帝三十五年ハ 人皇八代 孝元天皇三年二当り申候由二御座候

一外国之民皈化仕候ハ秦人最初之由二御座候往昔諸蕃二姓氏を賜候ハ其人々之本姓を措秦之時二皈化之者ハ秦を波陀と訓而秦姓を賜り漢之時来朝之者二ハ漢を阿夜と訓る文姓を賜候由漢字文字姓二而ハ同訓ノ旨二御座候金春家之遠祖秦之時来朝仕候故秦姓を賜候得共真之本姓ハ周之姫氏周公旦之後胤之由申伝候

一金春家先祖之名字ハ系図紛失故知レ不申候其内大藏省秦大津父小徳冠秦造河勝大藏省秦造萬里正四位上行大藏卿兼散楽博士秦宿禰氏安正五位下行大和權守秦宿禰勝清從五位下行左衛門大尉秦宿禰元清從五位下守式部權大輔秦宿禰氏信是等ハ正敷申伝候者二御座候氏信より唯今之金春幸之助皆之助迄十一代二而御座候私ハ十代二而御座候竹田権兵衛も十代二而御座候氏信男元氏より以来無位無官二成申候一魯之逸士豊楽翁苗裔大津父ハ秦酒公末葉とも申候得共分明之説無御座候

⑯〔諸書抜書〕『新撰姓氏録』、『日本書紀』、『本朝文粹』卷二、『寛政系譜』から関係部分を抜書きする。

⑰〔金春座歴代〕 初代大津父より六十六代氏勝まで列記する。

以上、『金春座系譜』の内容を概観した。ほとんど全てが金春座の系譜に関するものであることから、本ノートは、安住『金春系譜』から、金春家代々の事跡に関する資料を集成することを目的に作られたものと考えられよう。一方、『禪竹集』に所収される資料は、全く収録されておらず、『禪竹集』の編纂とは別の意図で作成された事が窺える。逆に、次章にて確認する『金春座旧案』には、『禪竹集』所収資料が多数書含まれており、同書の編集に密接な関りをもつと考えられる。次章では、この『金春座旧案』について見ていくことにしたい。

三、『金春座旧案』所収資料考

引き続きもう一冊のノート『金春座旧案』を概観する。凡例は、前章に同じ。

①〔題名他〕 松廼舎文庫『金春系譜』に関する記述（前述）がある。

②〔金春本「風姿花伝」巻末記事〕 「金春座の花伝一冊末に」として、金春本「風姿花伝」の末尾所載の記事を引用し、さらに、

「金春ハンアリ」との附録ありて明暦二年三月五日安喜の譲判をなす因りて惟ふに金春家にては此書をば観世々阿の作たることを忘れて禪竹の遺著と為し遂に書中の元清をば禪竹の父なりと冒するに至れり

と付記する。吉田文庫には、この部分のみを写した一枚物資料も存在する。また、この後に付された観阿弥の没年に関する注の中には、

○安住云近頃ノ観世大夫織部法名御観院白鳥代々菩提所濟海寺ノ墓所へ観阿弥世音之代ノ石碑ヲ建ル観阿弥忌日五月十五日ト有之也

との記述も見える。右の観世大夫は十九世清興であり、濟海寺は東京都港区三田にある寺で、金春八左衛門家、小鼓幸家、狂言驚家などの菩提寺でもあったらしく、過去帳四冊が現存する（『金春古伝書集成』六〇九頁）。

③〔「花鏡」・「六義」奥書〕 「花鏡 一調 二機 三声 音曲開口初声ノ右書物之奥書二」として『花鏡』の奥書を引く。吉田博士は、『世阿弥十六部集』に同書を「覚習条々」として掲載しているが、松廼舎文庫本が首部と末部とを欠く不完全な伝本であったため、奥書の存在を知りながら、それが『花鏡』であることに気付かなかったたのであろう。さらに「発端二 一古義者古今注ト云有之奥書」として『六義』奥書を引く。同書は、八左衛門家伝来本が現存し、『花鏡』も、かつて八左衛門家に伝来したことが『金春家之書物之日記』によって知られる。

④猿樂縁起 本文の後に、「安住考」として禅竹の没年に関する安住の考証を付記する。
『禅竹集』には、「円満井座方式」に附載する形で所収されている。

⑤永享十年金春太夫寄進春日神社石燈籠 同名史料が般若窟文庫に所蔵される。

⑥文正本・寛正本「六輪一露」奥書 「六輪一露秘注之奥書二」として文正本奥書を載せ「是は猿樂神楽（脇に「家業」と注記する）之道者ト発端に有し六輪之奥書也」と注記し、「又一露秘注の奥書二ハ」として、寛正本奥書を付す。

⑦『申楽後証記』・⑧『申楽濫觴記』・⑨『聖作正楽記』 『禅竹集』に「桃華老人申楽後証記」として所収されるもの。⑦・⑧は、小杉温頓氏の『徴古雜抄』所収本に依つたらしい。⑦末尾に数行を隔てて

右之外禅閣御筆ノ物有といへとも家芸之秘事ノ趣あり故ニ写アラハシカタシ 本書ハ嫡流ニ伝フ

とある。「六輪一露之記」のことをいうのだろう。

⑨は、奥書より竹田権兵衛廣富の書写と知れる。⑦・⑧は竹田権兵衛広貞書写本が現存しており（『金春古伝書集成』一〇三頁）、これらと同様に竹田権兵衛家に伝来したのであろう。

⑩一休和尚ノ題詞 『禅竹集』には「一休題頌」として所収される。『禅竹集』集録本文とは、順序が多少相違するものの、ほぼ同文である。

⑪円満井座壁書 『禅竹集』に安住の注記を含め全文を収録する。なお、般若窟文庫には、「ヘキ書ヌキ書」と題する氏綱の抜書が現存しているが、『金春古伝書集成』収録分は、これを底本とし、欠損部分を『禅竹集』によって補っている。

⑫『宗筠遠忌勸文』 ノートは、「宗筠元氏忌日ノ考」とする。『禅竹集』には、「円満井座方式」末尾（一七〇頁）に安住の注記を含め全文を収録する。

⑬〔寛政六年十月八日〕大倉六蔵書留 末尾の安住の注記から、寛政六年に大倉六蔵が持参したものを安住が所望して写したものと知れる。大倉六蔵は、小鼓大倉流八世の宣曹（ノブトモ・寛政九年没）であろう。宮増弥七は、『四座役者目録』に「弥左衛門ノ兄也。美濃権守ノ弟子也。弥七、中指ニテ鼓打初ル也。禅鳳ノ代ノ人也」とある人物。また、二月五日は春日大宮における、四座の長による式三番（呪師走）が行

われるが、この文面からは、金春大夫と大蔵大夫とが出動したように記述されており信じがたい。

二月五日ニ金春大蔵両座立合て春日大宮殿の八講屋にて両大夫罷出翁を一番仕候なり大宮との、神前にて呂律を仕る事はへいしゆの御かくらの時近衛殿其外撰家公家三十六人御参詣有て音楽をなされ候其外二ハあらず候然ル間何二而も候へ名人を立頭取五人ツ、の分くわへ候事ハ金春大蔵申合七衆徒の御中へ申上候而さため候也仍為後日証文如件

永正八辛未年 金春太夫

二月九日 秦元安在判

宮増弥七殿 禅鳳七十九歳

御返答

○安住云寛政六寅十月八日大倉六蔵法名宗山持参有之ヲ所望して写置所也後考元安ハ元文壬辰十二月十日行年七十九歳ニ而卒スト云云永正八年天文元ヨリ二十二年前也本書ニ禅鳳七十九歳ト認メ有之ハ後ノ年暦ヲヨクモ考エズして書添タルモノ歟尚是非多々吟味スベシ

○或書ニ美濃権守弟子宮増弥左衛門同権頭弟子宮増弥七郎トアリ宮増弟子四郎次郎也幸流之元祖也

⑭〔元安本五音之次第奥書〕「延享二年本多中務大夫殿ノ家老所持ノ書物五音之事トアリテ禅鳳居士ノ作ナリ（以下略）」として奥書を付す。家康旗下の譜代本多忠勝家が代々中務大輔を称する。延享年間は、下総古河藩主で老中を勤めた本多忠良が該当する。『元安本五音之次第』には多数の伝本が存在していることが知られており（『金春古伝書集成』八九頁）、それらのうちの一つであろう。『禅竹集』には、「五音次第」の末尾（十二頁）に「金春安住の系譜集録に曰く」と注記して所載される。

⑮天文年中宗瑞（氏照）江州訴訟の次第 ノートとは別に、転写本が吉田文庫に現存する。⑮⑯の資料を一括して収めており、ノート書写分を正書したものであるうか。

從 公方様御下知被下候曰天文十五年二月三日ナリ 南都寺門筒井ノ請狀モ同前ニ被下候我等ニ被下候御下知狀ハ年内ヨリ六角殿迄被遣候ヲ京都へ持テ御上候テ禅林寺為御使僧被下候從 上意様ノ御ソウシヤハ江州之御屋形様也六角殿ヨリハ禅林寺ト申御僧從江州京都エノ御使也同時聖護院殿エ伊勢守殿ヨリノ御狀モ被下我等京表エノ上洛天十五二月二日ニ罷上候則四日ノ日 上意様御対面被成候其日二下京迄罷下候明日五日ニ南都エ罷下候觀世モ五日ノ日南都エ下向候

○安住考右ノ文ハ金春太夫又大七郎氏照書留成ヘシ此上意様公方様ト有之者足利

家十二代之將軍義晴卿萬松院殿之事也大永元年ニ為將軍享祿元年江州ニ走り天

文元年帰洛也同十五年將軍職ヲ讓義輝卿ニ号光源院殿ト是足利家十三世也

この後『光嚴院殿御元服記』(『群書類從』第二十二輯武家部所収)からの抜書を載せるが、省略する。右は、天文十年、十三年の兩年にわたる春日若宮祭祀における金剛氏正と金春氏照との争論に関し、天文十五年二月三日に、將軍義晴より金春を上座とする旨の上意が到来したことを示すものである。これについては、表章氏「松下云事之状」(『能楽史新考』所収)に詳しい。

⑯「書状類」 前述の「松下云事之状」に関連する資料の写しである。多くは般若窟文庫に原本が現存するが、虫損、鼠害の影響を蒙った資料も多く、ノート所引分により文意解釈の手助けとなる。ノート記載分は以下の六種類である。(一)に表氏「松下云事之状」記載の記号を付した。

(一)「ワ」 天文十七年五月十八日付、平井加賀宛筒井順昭書状「將軍家の上意に従うべきとの内容(本文省略)」

(二)「ネ」(天文十七年) 二月十八日付、佐々木彈正宛晴長書状

(三)「リ」(天文十五年) 十一月二十八日付、平井、進藤宛順昭書状

(四)「タ」(天文十七年) 平井宛宗芸書状「金春參勤を了承する内容(本文省略)」

(五)「未收録」(天文十七年か) 霜月十九日 興福寺学侶宛佐々木定頼書状「金春參勤について了承することを求める内容、【タ】の前に入ると思われる」

(六)「又」 天文十七年二月十六日伊勢守・朽木民部宛佐々木定頼書状「衆徒に対する弁明(本文省略)」

前掲表稿により内容が知れる三編は省略し、特に価値の高いと思われる三編を以下に示した。

(2) 金春大夫儀蒙仰候條申附候處預御札候殊御樽濟々送給候御懇之至外聞畏入候猶三雲四郎三郎河井紀伊守可申候恐々謹言

二月十八日 晴長 判

佐々木彈正少弼殿

御返報

裏書仁木左京大夫

(3) 就金春太夫座牌儀被差下御使僧候畏存候然者參申事松下役相勤候珍重聊不存疎意令馳走候可然候様御取合所仰候委曲正法庵へ申入候條不能盡候恐々謹言

十一月廿八日 順昭 判

平井加賀守 殿

進藤山城守 殿

追而旧借等之儀於爰元一向無其沙汰候定可難請候於様体者可被御心安候

(5) 就松下神役儀金春大夫參勤候上意者度々御請候筋目雖不可有別儀候弥無異儀之様御入魂可為本望候委曲筒井可有演說候恐々謹言

霜月十九日 定頼判(佐々木)

興福寺学侶衆徒御中

この後に安住の注記があるがこれは省略する。

⑰「天文年中五師宗芸記」 宗芸は、右の書状中に名前が見える如く、興福寺の脇坊であつたらしい。後半は、金春宗瑞の東大寺転害会における演能について記す。

天文十七年十二月十日於社頭今春太夫法楽競望折紙銭五貫文々江可支配之由為評定被申送之間切符認遣之

○安住云天文十五十七年之比金剛大夫ト座配相論之節之書通之内ニ脇坊宗芸ト云書面有興福寺五師ト見ゆ

有人より 於八幡宮能之例在之哉又樂頭家之事被相尋候由旧記あらまし書付まいらせ候

天文記云

天文八年九月十三日転害会同十五日有能此時以金春為太夫自寺門補之候後日猿樂始也云々

○安住考此太夫も氏照宗瑞太夫也金春為大夫東大寺より補任と云事カ

天文八年九月十五日 ニ金春太夫ヲ東大寺ノ樂頭ニナス金春之面目也ト云々
あらまし相勤進候扱又於御社能在之候古例ハ毎度之事ニ候就中

旧記云

宝徳二年五月十七日八幡宮金若猿樂同十八日金春太夫能有之その外金春家元服ノ能および奉納等ノ能在之候へ共急候て相尋候事故一々不及吟味候尚勘置可進候以上

○安住考大昔ハ所ニ大社之樂頭ヲ持八幡宮も其内成ルベシ宝徳ハ文明ヨリ二十年程以前也氏信禪竹勤役成ベシ

⑱「旧記(元禄ノコロカ)」 金春家歴代の没年を記し、その後に金春座大鼓役者の名を列挙する。金春歴代の没年は「氏政系図(般若窟文庫所藏)」に一致しており、大鼓役者の名は「四座役者目録」の「金春方大鼓之次第」に記載されるものと同じである。

氏信ヨリ唯今重榮(禪珍) マテ十代ニテ禪竹七十歳宗イン六十八禪鳳七十九宗瑞

八十三及連七十四禪曲七十三清本三十五宗竹三十六 即夢七十九 禪珍 禪竹宗
印禪鳳ノ三代ノ内ニ延命大夫辰犬藤五郎いとくかるの弥四郎ナドアリ 宗隨 及
蓮禪曲ノ時代ニ大蔵二介 平蔵 源右衛門などあり
この後禪竹、禪鳳、喜勝、安照、氏昭の署名花押等を影写する。その末尾には、
此本以 □□□自筆書うつし申候也

金春七郎氏勝 花押

文祿三年七月十三日

右者らいでんの本の奥書也

○安住云七郎氏照法名雲翁宗瑞居士天文二氏昭文祿五十八年程ノ後ハ氏照之判ハ総
而改メ被申候歟元ハ善照トイ、タルヨシ是ハ至而若年之節ト考
とある。(雷電)の古写本は、下掛り系統のみが現存するが、該当のものは確認できな
い。金春家にも古い謄本が存在したのであろうか。

①天正十二年正月十九日竹田七郎宛秀吉朱印状写 秀吉より金春安照に宛てた、喜勝
の借金免除の朱印状。般若窟文庫に同名史料が現存する。

②猿樂伝記 金春家累代について記した部分より、金春七郎氏照の子供について記す
部分を書き抜く。

③ふるぎ事之覚書 野々村戒三氏「金春史考」(『能楽古今記』所収)に同名資料が引
用されるが、これも安住の書留によったものであることが記載されている。本文は以
下の通り。

〔安住記〕

一八左衛門申候ぎうれん代より今迄座をはつし申候者長命五左衛門おうじかわちに
觀世能御座候二大夫出申など申候へどもおして出申二付座をはつし申事
一他座へとられ候役者觀世与左衛門幸清二郎兩人ハこんげん様被仰付候春藤権七幸
清六兩人ハだいゆふるん様御代二二ノ九ニ而備中様御上意之由ニ而他へ被仰付候
八左衛門越年仕候とし
一藤村与一郎当地二つめさせ罷登候得共大蔵又蔵とかわり内證ニ而罷登申候故扱座
をはつし申候
一幸けつけん喜三郎座之者ニ而候得共幸王之家たえ申候二付扱今春座へ付申候
一しやうぐま大夫はせの十二大夫幸王大夫大蔵大夫日吉大夫春日大夫かやうの者む
かしハ四十五人つ、座之者つれ薪二金春下二付出仕仕候
○安住云ふるぎ事之覚書ト上書有之也

愚案幸王太夫ト有しハ宮王大夫ノ事成べし

往古ハ四座共本太夫之外平ノ大夫与申者数多在之庶子弟子等ノ一分ヲ立其座在之
候而本太夫之名代をも相勤又ハ連をも相勤罷在金春座ニハ十余人有之候人数増減
等も有之只今ヨリ凡百八十年前以前方々江所々分散仕所々ニ居留り本座江通路断絶
仕候も有之又ハ子孫断絶仕候も有之候金春座平ノ大夫之内宮王太夫と申もの芸術
覚伝候通元祖喜多七太夫に相伝仕名跡ハ絶申候太蔵太夫ハ甲州武田殿江奉公江罷
出候春日太夫ハ宮王同事ニ七太夫へ芸指南仕其子四郎右衛門ハ金春座連ニ相成候
○安住云此案ハ権兵衛安頼瑞雲ノ了簡ト見ゆ

右七太夫ハ宮王太夫子孫被無之故七太夫ニ芸相伝仕置候左候得ハ宮王太夫之代り
平太夫と相見得申候御家之押立候弟子とも相見へ不申夫故芸御直伝無之伝授事等
幸小左衛門家ヨリ伝授被為度候事与相見え申候

○安住云右ハ八郎静翁が権兵衛瑞雲ニ相尋ネタル返書也此文ハ広貞等吟味置候趣意
成べし(天明寛政のころ)

右のうち、第一条の長命五左衛門は、『四座役者目録』に金春座ツレとして見える長
命大夫の一派と考えられる。

第二条の觀世与左衛門は、太鼓役者で、『近代四座役者目録』には、「権現様上意ニテ、
觀世へ七七八ニテ来り」と記される人物。同書には、幸清次郎も「觀世ノ替ノ鼓ニ被
仰付ル」とあるほか、春藤権七も、「近年宝生座になる」と記述されている。このほか、
野々村戒三氏『能楽史話』所収のワキ方宝生家系譜には、「兄六右衛門寿朴徳川三代将
軍家光の命により『威陽宮』のワキを勤めし時、秦舞陽を勤め、それより別家に召出
されて、宝生座附本ワキとなる。」とある。また、「備中」は家光の代に猿樂奉行を勤
めた太田備中資宗であらう。

第三条の大蔵又蔵は、『明暦三年能役者付』(『岩波講座能狂言I』所収)に金春座地
謡として名が見る。藤村与一郎も同様である。

第四条の「けつけん」は、幸月軒(正能)で、晩年金春安照とともに行動をしており、
『四座役者目録』にも金春座小鼓と記載されている。

また、第五条の「しやうぐま大夫」は、榎並猿樂の一派であった生熊太夫で、『満濟
准后日記』に応永から嘉吉年間にかけて活動が記されている。「はせの十二大夫」は、
十二大夫座として知られ、觀世座との関係が深い大和猿樂の一座であった。幸王大夫
は、宮王ではなく宇治猿樂の幸大夫であらう。以上は、室町期に活動が知られる諸国
の大夫であつて、実際に金春座と関係があつたかどうかは不明である。日吉大夫、春
日大夫については、室町末期の記事に金春座の役者としてその名が見える。

②〔氏綱拔書〕 安住の注から七郎氏綱の書留(般若窟文庫に多数存在する)を子の八

左衛門元郷（寛玄）が写したものとわかる。内容は豊臣秀吉時代の能について記すものである。

一天正年中ノ能組秀吉公之時代也諸大名ニ御能御座候節千歳ノ事ヲ露拂ト御座候尤成名之由氏綱被仰候此時代春日大夫虎菊太夫ナド専二見ヘ申候併此時代ハ壹番ノシテヲ致し申候者ハ誰ニても名字ヲ書太夫ト書申候事之ヤウニ見ヘ申候

○安住云露拂ト云俗語ハフルク有之何事ニ而も一ノ先キヘスル事を路次ノ先キ立チヲスル心ニテ草木ノ露ヲ拂フト云心ナルベシ

○安住云右之内要又氏綱ノ拔キ書ヲ寛玄ノ再字也

○安住云右も元郷金四郎時分ヨリ追テノ聞書也（元郷ハ氏綱次子ニテ八左衛門家ニ留マル安住ノ父）

②③誰庵風聞書伝花集 『金春古伝書集成』（三三頁）に引用される安住書留（般若窟文庫蔵）に、

風聞書伝花集 一冊ノ右ハ安喜^{マツ}著述故、伝来書物ノ員外ナリ。但巻物七巻ノ内と示される如く、金春安照の話を安喜が筆録した伝書である。また、ノート末尾の「右は竹田権兵衛広貞が書せる所なり」との注記から、ノート記載分は、権兵衛が『風聞書伝花集』の一部を抄出し、その記事について私見を加えたものと考えられる。内容は、安照の死後、子の七郎重勝が弟の八左衛門安喜を疎んじたことについてであるが、この両者は晩年まで所領争いから義絶状態にあったことが知られており、事実とも符合する。なお、『金春古伝書集成』補注六六に引く、『南都御奉行所江差出候願書等一切写』（般若窟文庫蔵）所引の『風聞書伝花集』奥書の一部が、ノート引用文と一致する。

安照のおほせられ候かたはし聞覚たる所をかき事ながら子孫の爲なるへきかと存書記ス所也

此風聞書伝花集の始終前之誰菴安喜の語る所大概浄元の料簡なり其上一子相伝の根本よりハ禅家鍛術の義を宗々述たる事多し全く誰菴の御言を斟酌なしに輯録の書にてはあらず

我等兄の七郎氏勝果相果たる時は今の八郎親の七郎八年十四歳にてあり

此年譜ハ相違なし七郎氏勝法名岳窓清本ハ慶長十五庚戌年八月晦日行年三十五歳にて死去也此時父八郎安照六十二歳弟八左衛門安喜二十三歳嫡子七郎重勝十四歳三男権兵衛安信八歳なり

安照死去の後我等を敵として色々不屈千萬なる儀共これあり候へ共我等もそれにも構はず候處に其天罰にや程なく七郎相果申候

八郎安照法名誰菴禅曲ハ元和七辛酉年八月廿一日行年七十三歳ニ而死去也此時安喜三十四七郎重勝廿五安信十九なり其後六年目寛永三丙寅年重勝一男元

信出生の時分より重勝方より安喜へ無礼不屈多義絶也畢竟安喜之分知百五拾石の御知行を惣領家へ取返すへきとの企なり七郎重勝ハ寛永十一甲戌九月四日行年三十八歳ニ而死去法名ハ源靈宗竹と云此時安喜四十七安信三十三元信九歳なり

すべて此安喜の風聞^{マツ}伝花集は重勝元信父子の悪達無道なるよしを述べられたりされともさすがに惣領家の悪事なれば先祖に對し憚りを存せらるゝ故に不屈の子細をば隠密にして秘書とせられたり

○右は竹田権兵衛広貞が書せる所なり

（なお、この後に金春八左衛門家、竹田権兵衛家の系図を記載するが省略する。）

②④金春家蔵本謄抄七冊 般若窟文庫蔵「ウタヒ抄之奥書」に同じ。「慶長十一年七月日 安威撰津守重信」とある。

②⑤南都御祭松下渡次第 「慶長拾七年二月吉日金春八郎泰安照」の奥書の後に、「慶長十六年五月廿三日竹田金春八左衛門元照」の奥書を付す。般若窟文庫に同名史料が現存する。その後以下の文章が記されている。

文禄并慶長年中ノ諷本奥書ニ竹田善三郎元和年中ノモノニ竹田藤八ナドアリ善三郎トハ清本氏勝ナドノ舍弟カ藤八トハ宗竹重勝若名ナラン又白髭ノ小諷ノ箱書ニ楠河内守書金春大大夫章ト書カレタルモアリ正成三代ノ人々ノ書カレシ白文ニ大太夫氏照宗瑞ガ章ヲササレシニヤ宗瑞ハ明応文龜ノコロノ人ナリ

②⑥金春家之書物之日記 『禅竹集』（第一頁）に「其目錄は、金春安住が文政年中に集録せる系譜^{安田松庵の所蔵}に附載せられて、全文左のごとし。」として引用されている。『金春古伝書集成』（二二頁）には、宝山寺所蔵の原本により全文が引用され、詳しい考察がなされている。なお、ノート所引分には、末尾に安住の注記（金春七郎、元照、大蔵氏紀についての考察）が付されている。

②⑦禅珍六輪抄 『金春古伝書集成』（七六頁）に見える、金春宗家旧蔵、鴻山文庫現蔵の『六輪』が本書であろう。冒頭には安住の注記で、

明和九年息翁氏綱の奥書あり巻首に六輪の音声図あり僅に八九紙にて白紙もあれば未完稿にて中止したる初草なるべし

と記される。また、末尾には、

此抄ハ元禄宝永ノコロノモノナラン禅珍ハ宝永五年ニ死ス（書中ノ説ハ恐ラクハ六輪一露秘注トイフモノノ鈔録ナラン）

との考察が見える。

②⑧寛永江戸浅草勸進能舞台構絵図

此図は寛永の原図にはあらず後人修理したるものなりされどそのかみの結構を知るの便あらん縦四尺横三尺許彩色 於武州江戸浅草金春大夫竹田七郎秦重勝勸進能寛永の辰年三月廿一日始廿四日（以下略）。

とあり、簡単な図が添えられている。金春栄次郎からの借用を示す「覚書」にも書写されており、現物を借り受けたものらしい。

②⑨〔大蔵庄左衛門家資料〕冒頭に以下の如く安住の注記が見える。

安住云是ヨリ左ノ抜キ書ハ大蔵庄左衛門方ノ書物之趣也真偽相半之事々用ユルニタラズトイエトモ又附合スル事もアリ大低ノ所ハ大蔵ノ家ヲトリカザリテ書タル事多シ尤此書ハ後世違却シテ本家又ハ我家トモ確執スル種ナリ且他ノ見聞ニも不可然旨も有之旁幸ノ折ヲ得而若年之頃此本書共ハ取り隠シ置也畢竟ハ彼ノ家ノ為ナリ猶少々爰ニ書抜キ真偽ヲ評スル所也

また、直後には「是よりハ常休様に年々預置候覚書を今改書しるし置候」あり、また、奥書に、「元禄十年三月日 大蔵太夫秦経喜判」とあることから、大蔵庄左衛門経喜の書留と考えられる。全八条から成り、金春家、大蔵家歴代の事跡について記すものである。

第一条は、秦河勝と金春家に伝わる仏舍利にまつる説話を記す（本文は省略する）。

第二条は、大蔵道伊についての記事である。道伊（道意）は、文禄二年の大坂城西ノ丸演能や、禁中能などへの出演が見える人物で、『四座役者目録』には、「道違ハ、煩トテ、太閤様御他界以後、頓テヒツソクスルナリ。」「小左衛門大蔵道違ニ誓詞ヲ仕、鼓ヲ習フ。」とあるなど、ノット引用分とも符合する。竹俣和泉は、『四座役者目録』に「八郎時代ニワキスル、大蔵道智弟也」と記し、『大蔵系図』にも「太閤秀吉公に御奉公 知行三千石」とある。文禄二年の名護屋での演能（『甫庵太閤記』）にその名が見える。

一大蔵道伊ハ道知の弟也小鼓の名人也幸五郎次郎後に小左衛門と云法名月軒大かた道伊に稽古せし也道伊はいくさに立右のゆひニツ切られし故鼓をやめられし也道伊ハ太閤様へしゆつとうにて知行なともおほく拝領候よし一入威勢有し名人也道伊の兄に竹股和泉守とて太閤様へ御奉公知行三千石被下候也

第三条は、宮増弥左衛門とその弟子とされる観世新九郎と幸清五郎について記す。弥左衛門は弥六親次と称し、『四座役者目録』によれば周防山口に滞在したことが見える。また、同書には、新九郎を「唯授一人ノ弟子也」とし、小サ刀などを譲ったこと

が記されている。

一宮増弥左衛門筑紫へなされ（禪阿御自筆写しに有）召かへされ観世に道成寺相伝申伊勢の国住居仕也扱観世新九郎幸清五郎両方に宮増直伝之由申あらそふ由右弥左衛門筑紫へなされ候時分形見にとて新九郎先祖へハすあふ小サ刀をゆづる又清五郎先祖へハ小うたひ本のちいさきをゆつると也是にて考候へハ新九郎方まさり候様成と御咄也

△ 安住云右ニケ条余所ノ事ナレド見合ニ抜書

第四条は、金春及連が奈良の小西町に居住したことについての記事である。安住の注に見える高天町については、『大乗院寺社雜事記』（天明六年二月六日条）に居住のことが記されており、『安住行状之大概』にも、「其砌ハ、実家居宅ハ高天市町ニ而」と記されている。

一及連様時分ハ奈良の小西町に御住居被成候也表座敷格子の間にて知章のうたひ本を御写御座なされ候時かうしの前にて子共あつまりあの鼻そめかたと申しをそれにうつりて知章かはなをそけハと切を御書被成候咄有同しく禪曲様も小西町に御座なされ候也先祖の御事なれハとてめつたにかた口なく申間敷事也と此事御咄有し也

△ 安住考随分左もアラン今ノ高天町ノ本宅ハ太閤秀吉公ノ春日社御参詣の御催有之御旅館ノ為ニ相建候由然ル所何そ御差支に而も出来候哉終ニ御参詣ハ無之其旅館ヲ金春大夫江拜領スト是安照禪曲成ベシ今も表座敷其儘に而釘隠シ五三ノ炯ノ毛彫也尤其後稽古所等ヲ建又ハ平人の住宅故上段ノ間等皆以引キ直シ候ト察ス本宅地面公設御免地也此節之上段ノ襖子ナリシト極彩色松並木本家ニ伝来スフスマノ引手銃ノ跡ヲ金鉚ニテ埋有立也

第五条は、狂言方の大蔵弥右衛門家についての記事である。

一大倉弥右衛門元祖ハ金春四郎次郎と申て金春禪竹の末子と申候得共金春大蔵の家にかつて其沙汰なしいか、と被存候然共弥右衛門方にハ其通り申候也

金春四郎次郎同弥太郎（宇治弥太郎と云後ニ大倉ニ成）同弥太郎（法名道春）同弥右衛門道倫（西弥太郎と云）同弥右衛門（法名道てつ）同弥右衛門（法名道吉）同弥右衛門（法名道柱）今の弥太郎也

右宇治弥太郎其頃金春大夫（禪鳳歟）とゆひ分仕立のき宇治に暫住居仍宇治の弥太郎と申也金春を名のり候へ共右之通故其頃大蔵大夫道入を頼苗字をもらい大倉に成今に大倉と申候也右道倫初は弥太郎と申候時ハ芸不器用故大鼓に御取立被下候へと親の道春道知へ小姓に遣し置候道知請取置候て弥太郎に被下候ハ狂言ならてハ家ハつがれ申間敷とて朝暮狂言情出させ取立被申候所ニ一年程過親道春道知へ参候時弥太郎狂言の沙汰なく鼓をきかせ申さんとて道春前へ呼出し其時弥太郎

罷出たる者ハと狂言をいひ出し候へハ親道春はや芸に成候と申大きに悦色々礼を申つて帰る家をつがせ申候由也道知ハ諸芸に達し大倉ノ權守と申せし人也（以下の安住の注は省略）

狂言大藏流代々については、『わらんべ草』等に同様の記述がある。大藏道倫については、『四座役者目録』に「若キ時ハ声モ一図不出。笑ヒ物ニ仕タルト、道叱語り被申」と見えるが、大藏道智の弟子であつたとの傳承は見えない。

第六条以下は、大藏家代々の人物についての傳承を載せる。

一大藏大夫元祖八十郎法名道加と云金春禪竹三男也此道加ハ名人にて異名に四座ころしと云たる人也播摩の明石に住在所ハ大藏と云所に居住す仍大藏と苗字を改む在名也大藏と云所ハ明石の近所也道加芸道名人成故其頃京都將軍様より（公方義持公の時分也東山殿ともいへり）大夫号を被下大藏大夫に成候大藏座も出来其頃は六七十人程有し也結句其時分金春の座十七八人ほど有し也
安住云下ケ札ニ左如アリ

私考ノ下札アリ

正長元年二大夫号御免ト有（経春）義教公之時ト見義政ニハ有間數候

播摩より毎年南都兩度の御神事勤に御上下有し事也古き書物にも御神事の前に金春大藏の兩座勤之と有所多し大藏大夫に成座も出来候てハ南都に御住居也大倉九郎と云大鼓の名人ハ道加の養ひ弟也鼓一切の事道加御取立被成候也（大倉九郎事ハ甲陽軍にも見へ候）

一二代目も名ハ十郎法名道入と云（道加の子）芸道名人也此頃の金春ハ上手の聞へ無之禪竹子宗印などハまさしく下手にて有候故金春の座ハ七八人程有しかいつの頃か霜月廿七日御祭礼の時金春座金剛座はな金剛わたりの前後をあらそひし時金春座ハ僅に十三四人程有しかハ大藏大夫罷出て座の者共六七十人にて金剛をとり巻て是非をいはせず金春を先へわたせし事有しとや今に其例不違もとより金春なれハ猶以さきへ渡事也大藏大夫はたらき故也（以下に安住の注記を載せるが省略する。）

大藏大夫はすでに『至徳三年記』にその名が見え、応永年中には、勸進能を興行している（『東寺二十一口方引付』）。正長元年に大夫号を得たとの記録は他に見えないが、これ以前から大藏大夫の座は存在していたらしい。南都の神事も金春の代理として参勤するのが通常であつた。大藏九郎能氏は、小鼓大倉家が遠祖とする人物である。『四座役者目録』には、「金春ヨリ觀世へ召上ル也」とあり、大藏道加が取立てたとの記述は見えない。また、「氏政系図」に「播州大藏ト云所ニ住ス。仍而苗字トス」とあるの一致するが、事実であるかは不明である。金春・金剛の争いは、前述の「松下之云事之状」に詳述される如く、大藏の働きとは無関係である。

次条は、大久保長安についての記事である。

一四代目藤十郎後に大久保十兵衛又石見守と改む十九歳迄ハ大藏大夫を持此時大和国阿部と云所に住居さるによつて奈良八尾のつし今の家にハ藤十郎殿大父道知住居せられし也藤十郎殿芸道不情にて不器用成様に有しと也若輩成時分より武士の心懸有し故也さるによつて道入様弟道知伊に念比に大藏の家習秘事昔の咄共迄悉く伝置申されしと也藤十郎殿も芸道ハ伝ひ申され候へ共是も新之丞殿をうらやましくおもはれるか十九の年大藏の家を出先尾張にて信長の家中の奉公江成それより駿河へ御越暫時逗留其内浜松にて新之丞殿子孫御尋の子孫も有たる歟又々内々御留及も有候歟やがて浜松へ御越 権現様江御直の御奉公被成大久保藤十郎と改

大藏のかへ苗字大久保と申也ハ在名也先祖道加播摩国大藏と云所に御住居仍大藏と改又其大藏と云所近所町の門一ツを隔大久保と云所有依之大藏のかへ苗字大久保也二ツ共に在名也我等考申に唯今播摩より出雲海道之明石より大藏谷と云所迄五里大藏より大久保迄五里

藤十郎は、徳川家に仕えたことで知られる大久保長安である。また新之丞は武田家に仕えた土屋新之丞を言うのであろう。大久保姓が金春の替家であるとの傳承は信じがたく、「大藏谷」、「大久保」なる地名も現在の明石市に見えるが、苗字との關係は不明である。

石見守殿如此の御仕合故大藏の家しハらく中絶仕候 仍権現様江訴訟被申上候ハ昔より大藏ハ金春のかへの家にて金春絶候へハ大藏より続大藏絶候へハ金春より続たかひにつき合申作法にて御座候間金春大夫（大太夫禪曲）三男を養子に仕大藏の家をつがせ申度旨御訴訟被申上候処御願相叶則金春大太夫法名禪曲三男助六郎後二大藏大夫庄左衛門入道休岸を石見守殿養子に被成大藏の家相続被成候もとより金春よりわかれたる大藏にて如元此度金春と惣領庶子の家と成又大藏の血脈をも御つがせ可被成ため大倉道知子大倉平三此平三独娘法名教空様を石見守殿養ひ娘に被成大藏太夫助六郎を石見殿より婚礼御調被成被下候也

また長安が大藏道知の子、道喜の娘を自身の養子とし、金春安照の三男と結婚させ大藏の家を継がせたことは、般若篇文庫所蔵「一遺之聞書」に記されることが「金春古伝書集成」に指摘される。

この後さらに、大藏家伝来史料に関する安住の注記がある。

安住云 大藏ノ家ニ秘事口決ノ事一切書留無之事ハ安住若年之節ワケアリテ彼ノ家ノ書物ヲ悉披見ス休岸已前ノ古書ハ一切無之休岸トテモ一通リノ覚書迄也禪竹常休之頃出来候哉結構成表相ノ大巻物三四卷又外二も種々伝書アリ是ハ仙台殿ト御合体申御出入方御従者共ハ金銀ヲ御蒔散シ相談ツクニテ種々習事ノ差支無候様

ノ具合ヲコシラエ夫ヨリ諸流ヲ聞取り色々トエミコシラヒタル秘伝共一ツトシテ当流ニ引キ当テ可申事ハ無之也今ノ庄左衛門祖父大藏大夫ノ時仙台候ハ袖ヶ崎殿ト申至而クワツダツノ太守アリソノ御氣ニ入りニ而此時分も秘事ノ口伝ノト取リコシラヘタル事多シ諺ニ天ニ口ナシ人ヲモツテ云ワシムルト云事アリ仙台家中ニ而ハ夫故庄左方ヲ御家流ト申也既ニ今庄左衛門も本家ヘ達而断申是迄ノ風儀ヲ少々も相改メ候所家中ニ而ハ御先祖ノ御骨折御立被遊候御家流ヲ今ノ庄左衛門ハタヲシ候ト歴々ノ家中が申フヲシ庄左も暫ハサンノノ不首尾ニ而桜井熊谷等を大夫役も庄左方ヘ隨身御止メ可被成哉ナド風聞仕候旨今ノ庄左直々ニ安住若年ノ頃咄也我等其時ノ返答ニ少シモ無貪着セズ打捨置可申也御家流と申流義ニ而此芸道相立や否重役方取扱テ見被申候ハ其時自然ト相分り可申也此方ヨリ打テ出ルワ不宣候也第一先祖衆心得違ヨリ是も出来候事ト申聞セ候が其後ハ何事もナク相納り候也此一事ニ而も相分り候也成程観世ノ書物ヲ道伊口入ニ而高金ニ買取り夫ヲ聞相守り候哉此大藏大夫小手もキ、無法ニ素人ズキノスルヤウニイタシ候故御沙汰もヨク諸家ニモ多分ハ取用候得共少シ目ノ明キより方哉此一派ニ而ハ異名ヲ観春大夫ト申候由也是観世ノヨキ所金春ノヨキ所ヲ取りアツメタルト申異名也

伊達家では、元文二年に、間部若狭守詮方の南品川大井村の下屋敷と伊達家の下大崎の下屋敷を交換しており、これを袖ヶ崎屋形と称したことが知られるが、これは、伊達吉村の代であった。吉村は、伊達家能大夫の桜井八右衛門に命じて、大藏庄左衛門の流儀に改めさせ、「金春大藏流」と称する独自の芸風を確立した。右の資料は当時の状況について記述したものと考えることができる。また、安住が「今の庄左衛門」とするのは、文政元年に六十五歳で没した経典を指すものと思われ、その祖父にあたるのが経業（享保三年没）とすれば、右は、吉村の時代を指すものと見て問題ないと思われる。

この後、安住の付記の後に、元和三年二月十四日付の金春八郎安照と金春座中との往復書簡を載せる。

安住評云大藏ニテハ兎角ニ金春ノ替ヘ家ト云事ヲ云立レド是ハ金春家ニテ知ラヌ事也 金春歴代伝来ノ事ハ一子相伝ノ口授口伝秘書伝来ノ分不残淨元ニ写サセ為後証巻冊毎ニ金春八郎泰安照花押迄禪曲居士自筆シテ安喜ヘ附属也 是嫡伝ノ庶子ヘ渡リタル最初ニシテ夫ヨリ淨元養子二代目七左衛門（後八左衛門）照喜淨徹ヘ伝授ノ節右伝書共ノ奥書ニ兄七郎氏勝死去ニ附安照ヨリ嫡伝受持ノ事実ヲ巻物毎ニ加ヘ附属也 此方ニハ加程ニ正敷殊ニ安照公ノ不得止事先相方ノ掟ヲ改テ一子相伝ノ嫡伝ヲ初テ二男庶子八左衛門安喜ヘ附属也 中々権勢理窟金銀ニカカワリ秘中ノ奥儀ヲ容易ニ愛情ニヒカルベキヤ且証拠人等ノ事モ事ト実トハ懸隔ノ相違アレド思当ル事モアリ且愛情ニヒカレヌト云推量候旁以左ノ古書ヲ見ルベシ

急度申上候今度七郎殿江戸へ御下被成候ニ付座中致談合一書ヲ以申入候

一七郎殿へ御家の大事此度御相伝被成候て御下し可被成候事

一七郎殿御覚悟萬御形儀此中何とやらあし様に承候間御意に入申間敷と存皆々御異見申候へは何様に成とも御心得各如申にいたし可申由にて候間則御一札取申候 皆々右の段請にたち申候者此上にもあしき事御座候は、此者共に御申可被成候其上にて又可得御意候

一御家の書物共ちり不申様に被成候には七郎殿へ皆々御渡被成候て可被下候事

一中村少三郎に道成寺御相伝被成候とて肥後にて仕候と内々承候には餘へは無御相伝由にて候於御家々くるしからず候也

右之條々申上候事も江戸へ御下候に附一大事と存さて申事にて候かやうに申者共いつくにててもかけ身にそひ如在仕間敷候事

元和三丁巳二月十四日 春藤六右衛門 判

金春又右衛門

大藏弥右衛門

大藏長右衛門

金春惣右衛門

大藏源右衛門

幸 小左衛門

金春八郎様 参

安住云七郎トハ宗竹重勝ニシテ八郎ハ誰庵ナリ誰庵ヨリ座中ヘノ返答書モアリ先度は御状委被見候

一座の御はいたうの事新に不上候は、三分一御祭礼に不罷上者五分御おさへ候はん由ともかくも各次第一段よく候尤同心申候

一今度七郎江戸へ罷下に附各不殘御馳走可有由近頃於我等満足申候

一七郎きやうきはつとの事各御いけん候へは何やうにも各被仰候はん様に可仕由同心申に附則請狀御とり候由是又近頃と存候今迄見及分は家次可申者とは中々我等は不存候誰しもぬす人はきらる、段には人さへ聞はしやうそんなどが様にそらきしやうをかきすへもとをらぬ請狀をする事はむかしも聞及候事にて候間よく心静に請狀の通何もかもあひ候かよくおためし可被成候

一家の一大事此度つたへてくたせと承候 我等の家には代々申つたへ候はさやうにてはなく候何事もいらすは申に不及候入ならば家のさほうのことより外は拙者是不存候代々色々申つたへ候事とも有けに聞及候へ共我らふきように候て萬々の一もかほとも不存候間何の一大事と申をしそにつたへ可申様もあるましく候

へ共年去代々のふるほうくのされ大分おやよりつたはるかたはししせんには見申候へは大事は不存こうたが一つ今をしへてなるとゆう事は中々ならぬとい、つたへ候 まつ／＼聞てをき候はんと有事は五ちやうをたて親をおやにしんじしやうをしんじやうまひての上になけいをもおしなみかたのことにする時は親しやうも扱は此ものはものに成候はんと見附たる時は大事なりともい、おくなど承及候 いろはもかきあけさるものはしんのもの口にてをしへたりともかてん参間敷候かやうに申も我せんそへの申聞候おうち親家へのと、けみやうかのために候間如此候御分別頼申候 かやうにかき申候もめまひ候てひへあせになりめいわくに候へ共かたはし申分ず候へは各御ちさうの所をも不存やうに思召候はん間こらへてやう書附候何事も以面ならては申分かつ候

一 中村少三郎に道成寺つたへ候など御申候 右のかき附のことく家を大せつにみやうかのほとを存候 拙者が何として子ともにさへつたへぬ事をたうさのとうかなきとてをしへ可申候や御分別可有之候右のたんきと聞合御分別ならは各御かへてん可参候 さて／＼心つき也又是にて煩をもくなり候間下かきの分にてめいわく申候間筆やとい申候

これらの書簡が記された元和三年は、金春安照没年の四年前であり、すでに安照の嗣子氏勝はなく、次期金春大夫となる氏勝の子重勝の行末を案じた金春座中の面々と安照の書状であろう。春藤六右衛門は金春座脇、金春又右衛門は太鼓、大藏彌右衛門は狂言、大藏長右衛門（六藏）は小鼓、金春惣右衛門は太鼓、大藏源右衛門（助三）は大鼓、幸小左衛門（月閑）は小鼓である。中村少三郎は、「金春家祖先並芸伝来由緒帳」（金春十七部集）所収に、「八郎家来中村少三郎と申者、細川殿にて、是も千石被下候」とあり、肥後細川家お抱えの能太夫で、安照の弟子であつた中村庄兵衛と考えられる。さらにこの後に、慶長十年の氏勝と安照の往復書簡を載せる。金剛三郎が道成寺を勤めた際に、幸五郎次郎と金春安照が指南したとの風聞があり、それを糾す氏勝の書状と、その事実はないと安照の返書である。

昨日三郎殿道成寺被成候之由承候然者五郎次郎らんひやうし指南申候由とり／＼風聞の由 又一せつは貴さま御指南之由二せつ申候由如何と方々より申来候我等可存候間承度候由申来候何と返事可申候哉但御指南被成候哉如何是又承度候為其令申候猶以貴面可得御意候恐惶謹言

三月六日

氏勝

尚々今ほど道すたり候間たれ人も思ひ／＼の心ま、にて候間尤へん不入候

三郎殿道成寺せられ候由候て風聞之由承候拙者の家にはいんか能にて候間そつしに他へ伝候事不成候間中々我等は指南不申候其上我等家にはしよしの仕候事さ

へそのは、かり有事に候たとい他には何ともあれ我等いへには此能などをほそんにもちい候間むさとは不仕候たうせいはまことのめくらへひにおちすにて候間尤へんに不及候

八郎

金剛三郎にらんひやうしおしへ不申候於偽には春日の御はつを可蒙者也

慶長十年三月廿五日 竹田八郎安照 花押

金春七郎 殿

右往復ノ書面ハ皆本家伝来ノ物ニシテ加程迄家業ニ附キテの嚴重成事見候ベシ前頭ニ推評スル如ク大藏家へ無據休岸ヲ被遣候トモアノ方ワアノ方トシテ芸道ノ事一切ニカマイナキ故ニ一通ノ習事ノ務ニモ差支申ニ附伝授アリトモ畢竟一通ト云物也ナンゾ一子相伝等ニ及ハンヤ晩年次男浄元へ初テ相伝アリタルヲ以テ大藏ノ書伝ハ皆以虚偽タルヲ知ルベシ夫ヨリ慥ナル証拠アリ安住謂レアリテ彼家ノ伝書共不殘見タルニ正伝ノ事正伝ノ秘書一本モ無之タ、拍子方等ト相談ヲ以テ夫ニ思ヒ／＼ノ我意ヲ交セコト／＼數書タル物アレド皆以新數休岸時代ノ書ハ謄本其外浅々數書留迄也三男休岸伝授ナト云ハ皆以後々工ミ書立タル何流力知レヌ秘訣トモナリ

氏勝主ノ文面ノ五郎次郎ハ小鼓幸流ノ先祖ニテ金剛ハ幸ヨリ伝授シタレド当時ハ金春ヨリ伝授ト風聞ヲ數タル成ベシ今モ金剛ノ道成寺ハ幸方ヨリ伝授シ小鼓ハ幸流ニ限ル

彼大藏家ノ書物四冊ノ奥ニ

元禄十年三月日 大藏大夫 秦經喜判

金剛三郎は、喜多流の初代七太夫の元服名である。七太夫は、表章氏の『喜多流の成立と展開』（平凡社、一九九四年）によれば、慶長六年までには金剛三郎と称していたとされており、慶長十年は、金剛三郎が養父の死に伴つて金剛座を継承した年である。また、この前後に金春八郎の娘を娶つており、『四座役者目録』にも、安照が金剛三郎に八番の能を教えた旨が記されているが、金春家では道成寺が重視されており、安照も伝授しなかつたのであろう。また、『猿樂伝記』には、「七太夫が家、元金剛が弟子なれば金剛流にて、手前の料簡を以金春流をも学ぶ。故に、幸小左衛門・葛野九郎兵衛・森田庄兵衛・今春惣右衛門と諸事を申合、道成寺をも定る」とあり、幸流の乱拍子もあつたようである。

以上、『金春座旧案』に記された諸史料について概観してきた。末尾に記載される大藏庄左衛門家の資料をはじめ、竹田権兵衛家や、その他の弟子家、大名衆に至るまで、他家の史料を多数調査していたことが知れる。また、多くの史料には、安住による注が付されているが、これはそれぞれの史料についての考証を反映させたもので、安住

の博学ぶりが窺える。同じく学問好きで知られる観世元章は、自らの国学の知識をもって家蔵伝書の本文改竄を次々に行ったが、安住には、こうした態度が見られず、『安住系譜』は信頼に足る史料であると考えられよう。

おわりに

以上、前稿では簡単にしか触れることができなかった金春座関係のノート二編を紹介しながら、それぞれの記事について考察を加えた。本ノートは、金春安住の『金春系譜』を基に多数の史料を書写しており、現存しない『金春系譜』の姿を窺わせるものとして有用であるといえよう。特に般若窟文庫などにも現存していないと思われる史料がいくつ含まれており、金春座関係の研究に資することが大きいと考えられる。なお末筆ながら、資料の紹介を御許可賜った吉田家当主吉田ゆき氏、ならびに吉田文庫長旗野博氏に対し、記して感謝申し上げる。

注(1) 早稲田大学演劇博物館演劇研究センター編 (二〇〇六年)

(2) 池内信嘉編 (一九一五年 能楽会)

(3) 野々村戒三編註 (一九三二年 春陽堂)

(4) 表章 伊藤正義校注(一九六九年 わんや書店)

(5) 『能楽史新考1』表章著(一九七九年 わんや書店)

(6) ノート引用部分は、『金春古伝書集成』引用分のうち「…後先きらわず書付畢」までに同じ。『鴻山文庫蔵能楽資料解題 中』(一二五―一二六頁)にも、金春禪珍筆「六輪一露抜抄」として、同文が引かれ、解説が付されている。

(7) 「能と狂言」第二号(能楽学会編)に中司由起子氏による紹介がある。

(8) 前稿に翻刻を記した。金春栄次郎から吉田東伍宛に、家蔵史料二十点を貸し出す旨が記述されている。

(9) 『安住行状之大概』(『庶民文化史料集成 第三巻 能』所収)文政四年二月十二日条にも、嶋屋吉兵衛の書物により、「細川侯藩中、中村庄兵衛と申物ハ、禪曲居士弟子ニ而、則、芸道申立、仕官之節、関寺小町等ニ至迄、荒増一通り伝授被遣候」と記している。

(10) 大蔵庄左衛門家については、『安住行状之大概』寛政十年二月七日条に、久しく義絶状態にあった大蔵家が、誓紙によって指南を求めたため、これを了承し、翁、道成寺等を教示した由が記されている。特に大蔵大夫の表子求馬(後の経良)は、安住が自らの舎弟として芸事を教示したらしく、伝書を見る機会もあったと考えられる。

本稿は、特定課題研究助成(2006A-943)の成果の一部である。